

サハラ・ザック

サハラ砂漠のど真中にタマンラセットという街がある。月世界のような姿をみせるアハガル山群に囲まれて、街とはいっても手でなすりつけば砂の中に消えてしまう程に小さく平べったい。僕はそこでバック バックを作った。三日間、拾ってきた車の座席の骨組をフレームにして、旅の仲間からもらったナイロン布地を縫いあげてなんとか形にした。そこまで出来ると欲が出て中央部にブランドネームを入れた。

サハラ ザック

頭文字だけとればサザ、僕の名前になった。手製のザックは小さいし、頑丈ではないが、僕の荷は全て入ってしまった。

実はサハラの玄関口アルジェを直前にしたコンスタンチンでザックを一つなくしていたのだ。ヒッチハイクした車のキャリアに載せておいた荷が走



行中に落ちた。その日から歯も磨けなくなった僕はアルジェで寝袋がわりの毛布を防寒着にダブダブのコートを、その他の必需品だけを買った。旅の中で知り合った日本人の仲間が薬やフィルムをくれ、また消沈の胸をたたくように始めたヒッチが友情厚い出会いをもたらし、ベルベルの若者がジーパンを、アメリカ人旅行者がTシャツをくれ、少しずつ荷物が充実

しながらここまで来た。ザック替わりにしていたナイロン製の手提げ袋ではこの先たよりない。そんな時に座席の骨組を見つけ飛びつくようにサハラザックを作り始めたのだ。



From Tokyo 1976-77

日本を発ったのが1976年の9月、ネパールから中央アジア、西アジアを経て、エジプトから北アフリカを西走してアルジェリアにたどり着いた。半年が過ぎていた。

僕の旅は計画書の題名が**FROM TOKYO**という文字どおりの旅だった。国境を通過するたびに国というものへの興味が増大し、一ヶ国でも多く歩こうと考えつつも所持金は希望とは逆に減少し、アフリカも一部しか歩けなくなった。

僕は迷わずサハラを選んだ。世界中のどの地よりもサハラは魅力的に見えた。シルクロードを歩くうちにすっかり砂漠が好きになり、エジプトでは砂漠とナイルの神がかった配置に魅せられ、海を右に走るリビアの砂漠に痛快な味を得た。



広い広い台地、原点の色を見せる砂漠の旅、その中で本物の、底力を見せる奥深い広がりを見せるサハラの旅はFROM TOKYOの中でも最も興味のある目標となった。

サハラ砂漠を横断する道は三本あり、僕は最も美しいルートといわれるタマンラセット経由を選んだ。このルートは三本の中で最もポピュラーであり、交通手段はアルジェからガルドイアまで毎日バ

スが走り、ガルダイアからタマンラセットまでやはりバスがあつて苦勞はないが、そのバスは十日にっぺんしか走らないから席を確保しないとまた十日間待つことになる。このあたりがアフリカの旅のむづかしいところで旅のセンスが要求される。タマンラセットからニジュールのアガデスまでは900キロ、バスはなくて不定期なトラックをつかまえて荷台に乗っていかねばならない。二日間の行程である。

幸運

僕はタマンラセットの小さな街で顔なじみのツーリストが「今日もトラックは来ない」としけた顔をしているのを見ていた。少しずつライバルとなるツーリストが増えているのも気になった。いつ来るかわからぬトラック、そして何人乗せてくれるかわからず、知らぬ間に出してしまうかも知れぬトラックの情報を得るのは伝語のできぬ僕には大きな不利であった。

そこで僕はキャンプ場にいる乗用車でサハラを下る連中に近寄り、同乗を匂わせて歩いた。皆、仲間うちで楽しく走っている連中だからなかなか誘ってくれない。ガソリン代を折半にするため乗



せることもあるのだが、そうそううまい口はないものだ。

ところが、初めは乗り気ではなかった仏人のチームから、「もし一緒に行く気があるのなら水と食料を用意してくれ、今日中に出発だ。」といわれ、大いにあわてた。さっそくパンを買い、ポリタンクを求めて水を入れ、その昼には国境事務所で彼らに加わった。

見事にサハラのヒッチが成功したのだ。

街はずれのスタンドでガソリンをたっぷり補充した。これから400キロの間補給できない。僕はガソリン代も払わない。

「金はいらぬよ。水と食糧だけあればいい」と言われた。あまりに幸運すぎた話である。

1日目

プジョー

さあ 三台のプジョーは出発した。先頭は最年長、髪の毛は薄い時にきびしく時にやさしく輝く眼をもったオリビエの車、グリーンのライトバンである。続くはまだ22才、オリビエの彼女、ボリュームのある身体、油と埃にまみれてのドライブを嫌わず男まさり、それでいて化粧の手はゆるめぬパリジェヌ、美しいマルチンの運転するブルーのライトバン、しんがりは小柄でまだ若く力強さはないが、パリッ子の雰囲気をもつベルナードと僕が乗る白い乗用車。

「サザ、GO!」といってベルナードは僕の肩をたたき、「ヤッホー」と僕も大声を出す。さあ思ってもみなかった乗用車でのサハラ越えが始まるのだ。僕にとっては最も理想の旅になったわけだ。だが僕は喜びながらも緊張した。彼らの親切に充分に答えなければならぬ。楽しい仲間の一人にならなくてはならない。道は山道のように、小さなカーブが続く小山を越えて行く。路面は洗濯板のように小さな凸凹ができ、80キロ以上で走らないと猛烈にタイヤがバタつき足まわりそっくりバラバラになりそうである。ベルナードはすぐにスピードを上げ80キロにする。小さく急なカーブ、小さな凸凹の頭だけをかすって走る、その頭には砂がのっている、すごい砂埃が舞い上がる。それらすべてが危険に満ちている。

「まるでレースのようだ」と僕が言えば「オリビエはバイクのレーサーだよ」とベルナードが言う。

「アハーン」と僕は納得した。オリビエの車はもう遙か彼方を走っている。それに遅れずマルチンも突進していく。

「彼女もレーサーか」「いや」「ベルナードは?」「前はそうだった」そんなわけで彼らの運転は素晴らしい。だが助手席にいと恐ろしい。陽が沈む頃、オリビエがボンネットを開けて止まっていた。まだ15分しか走っていないのにオーバーヒートしたのだ。

「どうやらこの旅は大変なことになりそうだぞ」結局その夜はそこで終りになる。小山に囲まれて木もある。僕はさっそく薪を集めて仏人三人の中で僕の存在を知らせることに勉めた。

オリビエとマルチンはあまり英語が話せない。それでも気の好いオリビエは話しかけてくれる。

「僕はヤマハとカワサキをもっている、前はホンダだった」オートバイの話である。

「スズキ」とマルチンが一言。彼女も250ccをもっているらしい。

パリジェヌとパリの紳士が相手だと僕はどうものることができない。僕にはアメリカやカナダ人のラフな相手が適している。食事は彼らのごちそうになった。食糧を準備してくれというから別々に食べるのかと思っていたら、どうやらそうではないらしい。勝手にわからず日本人のヒッチハイカーの心は揺れる。その夜、オリビエとマルチンはライトバンの中に広いベッドをつくり、ベルナードはその小さな身体を座席に横たわせた。僕は外に寝るべしと考えて夜空を仰いだ。蚊も蛇も山猫もこうして緊張した夜には怖いものではなかった。不思議なことに月が遅い、昨夜は見事な満月だったのに。それで満月の星空、仲間から借りた寝袋カバーのおかげで朝まで暖かく眠れた。

「あつという間に仏人とサハラ越えか、旅とは面白い」その気持ちが身体に充満していた。

2日目

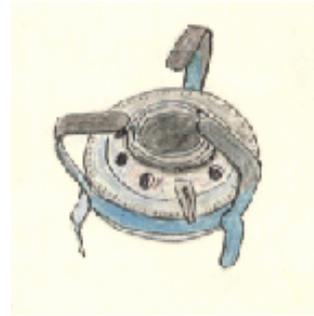
トラブル

二日目、未明のうちに出発、空が少しずつ明るくなったところでオリビエの車がパンクした。まだ冷たい空気の中でパンク修理、それぐらいなら僕でもできるが、メカに強く、よく動くオリビエが皆やってしまう。ベルナードがラジエーターの水、油を点検し、マルチンがコーヒーを沸かす。客人であってはいけない新参者の日本人は何もできずウロウロ。

一時間後に出発、猛烈な乱暴ドライブが始まった。すぐにまたストップ！ポンプの故障でオリビエがさかんにいじくるがままならず、とうとうセルまで回らなくなりロープでいちかばちかバンパーをガツンガツンとぶつけて押しついたりしないとエンジンは回らなくなった。一台はオーバーヒート、一台はセルが回らず無事なのはベルナードの車だけ、まだ真中にいるのに。

「こいつは大変なヒッチをしちゃったぞ」どうやら押し役を一人探していたようだ。でもその方が僕にとっては気が楽だ。

サハラは山間部を終え広がってきた。三台はその広がりの中を右に左に飛び出していく。砂の表面を滑っていくようである。



ビジネス

「この車はニジェールで売るの？」

「うん」

「いくらで買ったの？」

「500ドル、それを二千ドルで売るんだ」

「ウエー」これはまさにビジネスだ。話は聞いていたがこいつは素敵な旅だなあ。

すると前方にタイヤやら荷物やらを山と積んだプジョーが斜めに傾きながらのろのろと走っているのが見えた。あつという間に抜いてしまったがその運転手は老人だった。なる程今やサハラは冒険旅行ではなくドライブコースといわれる所以だ。だからといって地図上ではっきりしているほど道は確かじゃない。50キロごとに標識の黒い2メートル位のポールが立てられ距離まで書かれているが、ほかは部分的に石が積んであるか、わだちの跡を追うしかない。広いから自由勝手に走れるが砂の深いところにはまればアウトだ。

1m

一時間走ったらマルチンの車がまた故障、砂が深いから引くこともできず、表面の堅い所まで追い出さねばならない。エンジンの力なしで押すのは大変なことだ。脱出用のプレートをひき、力一杯押し進ませられるのはそのプレートの分1メートルだけ。気温が上がって風が吹き始め砂が容赦なく飛んでくる。それでもやっと脱出させると僕はヘトヘトになりながら手伝えたのがうれしい。

出発すれば直ぐにドルフィンのように走り出す。どうしてそんなに乱暴なことをするのかと思う。

「レーザーだからしかたない」でもやばいぞと考

えた矢先、今度はベルナードが急に真剣な顔つきになってスピードをあげ先頭に出ると停止した。

「どうした」「ガスがなくなってる」

あんまり飛ばしすぎて底を激しくぶつけたためタンクに穴があいたのだ。出発してから七時間、四回目のストップ。オリビエがガソリンを抜いてしまうと「待たなければいけない、接着剤で穴を塞ぐんだ」と言った。太陽は真上に来て、風は熱を含んできた。日陰は全く作られず広い広いサハラの中で昼気楼が青く揺れていた。ベルナードは近くの山に歩いていった。マルチンは驚くかなビキニ姿になってしまった。「流石パリジェンヌ」と感心しながら僕は眼の向けどころがない。「ここはサハラじゃなかったか？」僕はターバンで顔をすっかり隠し砂の上に大の字になった。風が強いから熱くはない。だが30分もして眼を開けると痛くてたまらない。砂が入ったせいか焼けたのか目薬を入れるがダメで充血がひどい。「流石サハラだ」



1時間をロスして出発したが、10分もしないうちにまた故障、そして1時間のうちに続けて3回ストップ。オーバーヒート、オイル替え、プラグ替え、疲れと空腹、はかどらぬ行程、皆の顔にイライラがみえる。それでもオリビエは笑顔をやさしくマルチンもよく動く。だが今度はオリビエの車がパンクしてとうとうオリビエも「なんて日だ今日は」と大声を出してそのまま寝込んでしまう。ベルナードと僕はタイヤを取り替え、そしてチェスをやった。僕は教わるままやったのだがどうしたわけか勝ってしまった。

リタイア

疲れた身体を起こして再出発。マルチンの車は既にオリビエにロープでつながれたままだ。今度はゆっくりと走る。すると調子はやはりよい。途中

僕らはカラフルなものに出会った。オレンジ色の車がエンコしている。男が二人エンジンまで外して修理している。その横に女が二人コーヒーを飲んでた。夕暮れの気配をみせたサハラの中でそこだけはネオンをつけたように浮いてみえた。僕は急に元気づいた。故障しているのは僕らだけじゃないぞ、それにこのカラフルな姿、自分が今サハラをドライブしていることが感じられて嬉しくなった。

後日の情報で彼らは修理しきれず、ついにタマランセットに引かれながら帰ったという。調子よかった僕らはまたしても砂にぶちこんでダウン。一台はエンジンの力をかりて容易に出たが、マルチンのは大変だ、セルがまわらないのだから。疲れきっていた僕らの動きはにぶい。プレートをひいて押してひいて、1メートルずつ進めていく、しゃがみこむと起きるのがつらい。この苦勞と絶望感はやった者でなければわかるまい。太陽が沈むころやっと脱出。

「あー、セルが回らないでこの先どうなるんだ」と不安になる僕の前にトラックが来た。出会う車すべてが停って挨拶を交していく現地人の頼もしさと言ったらない。トラックは大きなタイヤをカラカラと回して砂の深いところも平気な顔で通過していった。

カナダ人ハイカー

少し走ると朝方追い抜いたノロノロ車がキャンプを始めていた。ノロノロ車はのろいが停らない、こちらは速いがストップばかり、抜きつ抜かれつ、とうとう負けたらしい。彼らは英国の老人とその息子、息子はなんと足にギブスをはめていた。そしてフレンチカナディアンの男女、彼らは僕と同じヒッチハイカーだった。「やってるね」とお互い眼で合図した。

僕らはまだ進むようだったが道を失いキャンプにした。僕は長かった一日を思い浮かべながら、仏語の世界に入り込めず仲間の一員になりきれていないのを感じた。それでオリビエにチェスを申し込んだ。

3日目

夫婦でランドローバー

昨日はストップを繰り返しながらも260キロ走ったから今日中にはなんとかニジェールとの国境インゲッサムまで行けるだろう。そんな気分で僕らは出発したのだが10分のいかぬうちに砂にはまってしまった。またしても途方に暮れる作業が始まった。タイヤの進む方向にボールやナベで溝をつける。砂という奴はサラサラとしてよけてもよけても崩れてしまう。中に砂が入り込むが乾燥した空気の下では気にならない。べったりと座り込んで僕はこの時とばかり懸命にガンバった。するとノロノロ車が現われて見事に僕らの後でダウンし、押す人間が増えてうれしい。

そしてそこへ僕らの眼にはスーパーマンのようにみえる強いランドローバーが現われた。乗っているのは老人夫婦だ、世界一周の途中だという。定年後であろうか、その姿、日本では見られない。日本人はすべてのエネルギーを仕事に燃やし尽くしてしまうのだろうか。砂漠の中では出会うものすべてが仲間である。ここには救援の手はない、すべて個人におかれる。むちゃな行動もすべては自然と個人との戦いに於いて裁かれる。物好き同志で助け合うそれが大自然の中での行為である。

僕らは彼らのランドローバーのおかげで容易にそこを脱出した。そこそこ20mの脱出に三時間をロスした。ランドローバーが来なかったら半日はつぶれていたかも知れぬ。だが五分も行かぬうちにノロノロ車が砂に埋った。

24日間待っている

そこにはトラックが一台、運転席と荷台を分離して放置されていた。その運転手がノロノロ車を助けている。故障したまま放置しておくエンジンも何もかも持ち去られる。道中、そうした抜けがらが数多くあった。それは砂ばかりの死んだ世界によく似合っていた。聞いてみるとなんと24日間も救援を待っているというのだ。一日上下6台位しか行き交う車がないところで24日間も気がふれず待てるものなのか。食料はとっくに尽きて、出会う車から分けてもらっている。オリビエもパンと缶詰を手渡した。

難所はまだ続く。見るからに砂の深そうな地点に来てオリビエは車を止めると、1キロ先ま

で道を捜しに行った。表面の堅い所を捜してケルンを積んでいる。僕らは何もできずに待った。ノロノロ車も行動を共にすると言ってきた。カナダのカップルは名をイボンヌとダイアナという。イボンヌは横に張り出した鼻髭を持ちターバンを巻いている姿はまるで山賊のようだった。ダイアナは名に似合わずインディアンのような顔をして肌は若い光を失っていた、どこかに寂しげな影がある。彼らは僕と同じ年齢だった。

「どうだい？」

「すごい旅だ」そう言って僕らは笑った。

オリビエの策はうまくいって僕らはその難関を無事突破した。だが例によってオリビエがエンジンをいじくりだした。一時間後にスタートしたがすぐに「まだダメだ」と言ってやり直し、とうとう三時間いじくりまわった。イボンヌとダイアナは仏語と英語を話す。

イボンヌは言葉に不自由しないからどんどんオリビエ達の中に入って手伝い、会話をする。押すことしかできない僕はますます取り残されてしまう。仏人というのは個人主義に徹しているのか、僕が一人で黙り込んでいてもかまおうとせず自分だけで話を続ける。会話の中に入れず、かといってそっぽを向いているわけにもいかない状態というのはなかなかつらいものである。

だがつらいのは僕だけではない。ノロノロ車の中では老人が長身の身をもてあまし。さらにギブスをはめた男は身動きできずに煮え返った車内に閉じ込められている。

二時間後にやっと出発、実に出発してから九時間、20キロしか走ってない。だが難所は終わったらしくしばらく行くと道は石コロののったよい道になった。サハラは広がりの中でも小山がみえる山の奥といった感じから、時おり砂丘が美しい肌を見せる様な地形に変わり、どんどん下って行くように思えた。そして今度は真底広い広い台地が始まって遥か地平の果てに岩山が低く見えるだけ、道はよし、エンジントラブルなし、落日のオレンジの中をスラローム、それはまるで深い雪の中をトップを浮かして輪を描くスキーさながら。

「これこそドライブだ」ベルナードは喜ぶ。でも僕は喜びながらも「きつとまた何か起こるさ」と考える。

案の定マルチンがストップ。その時陽は落ちた。ノロノロ車はそこでキャンプをすることになり、

カナダの二人はノロノロ車から僕らのチームに加わった。道が良くなったから追い出されたような感じである。

闇の中を走る。国境まで行くつもりらしいがそう甘くはない、まだまだ砂の深いところはあつて見事に三台もろともはまってエンド。

カナダの二人はテントを持っていた。ベルナードが入れてもらえばといったが僕はすっかり遠慮がちになっており三日目の夜の星を仰いだ。

4日目

清潔

四日目、陽の出と共に車を押し出して出発。その太陽はやけにギラギラしていつもと違っていた。今日はいよいよニジェルだ、そこに何かが待っているのだろうか。

僕は二度オーバーヒートを起こしたが二時間後にインゲッサムにつく。そこに部落があつた。遠くからみていると岩は見違えるほど小さく砂と溶けあっていた。家の数は50位だろうか、人がいるとわかれば胸に嫌なものが入り込む。そのにおいがその汚れがいやだ。砂漠に一つの汚れもなかった。死んだ世界はなぜか清潔であつた。強烈な太陽の光線がすべてを焼き尽くしそれはカラカラに乾燥し汚れを灰にして風と共に空に舞い上げてしまったかのようにあつた。

僕はそう考えてハッとした。「そうか砂漠の最大の魅力とは清潔感だったのだ」今まで好きでたまらなかつた砂漠なのに本当の魅力がつかめずイライラしていたのだが。

ここでは出国のスタンプはすぐにとれたが給油を必要とする僕らにはまたしても問題が待っていた。ガソリンは大量にあるのだがポンプが故障しているというのだ。アガデスまで500キロ、それまでは給油できない。故障では済まされぬ。オリビエは「よし俺が直してやる」と得意のいじくりを始めた。だがうまくいかぬ、とうとう昼が過ぎた。僕は手伝うこともできず一人でボーッとしていた。すっかりボーッとするのに慣れてしまった。遠くの蜃気楼が広がってゆらゆら揺れている。そのゆらゆらをじっと見ていた。

呆け

僕は旅の中でボケ症状には段階があることを知った。

物思いにふけりながら一点をみつめているようなのはまだ正常である。東京にいてもそれはみられる。一期症状というのは、動作を起こそうとする前にフーッと何かを考える。したがって動作を起こすまで時間がかかる。

次に二期症状になると、何か対象物をみつめると眼が離れなくなる。見つめながら別のことを考えているのではなく、眼に入ってくるものだけを認識して別の思考はしてない。そして不思議なほど眼が離れない。パキスタン、アフガンあたりを旅しているとそんな眼によく見つめられて腹を立てたものだ。ところがタマランセットまでは一期症状だった僕もここまで来てとうとう二期症状を迎えた。ただ蜃気楼のゆらゆらをみつめるだけ、何も考えてない。このまま進んで三期四期というのがあるとしたら経験したいようにも思う。

ボケていても知能が落ちるわけではない。正確に人の話は聞けるし考えることもできる。早いテンポで話されても追い付いていけるが、答える時がガクンとテンポが遅くなる。もしかするとそれが三期症状かも知れぬが、当人にとっては少しも嫌なものではなくむしろ酔っているようで楽しいものだ。

静寂

僕の目の前に映っていたユラユラの奥でボロボロと音がするような気がする。だが何も見えない。砂漠というのはとても静かなものだ。光が強いかから静寂は感じさせないがその静けさには驚かされることがある。ある時僕は砂漠の中でスケッチをしていた。タバコの灰が長くなって風に落された。その時僕はボコッという、灰が地面にぶつかった音を聞いた。それほど静かなのだ。

ボロボロという音はだんだん近づいてくる。そしてノロノロ車が屋根の上のせたタイヤの色を少しずつまるで潜水艦のように蜃気楼の海から持ち上げて走ってきた。老人もまだガンバっている。

ミス

僕らは、五時間もロスしたがなんとか手動装置を直してガソリンの問題は消えた。水もすっかりなくなったので井戸で水汲みをすることにした。その仕事は僕が受け持った。これぐらいはやらねば

ならぬ。だが僕はそこで大きな失敗をやらした。

井戸は5mほどの深さだった。桶は大きな底の平たい鍋だった。それでソロソロと降りしているうちに、これでは鍋が水面に浮くだけだと考えて思いきりよく落下させることにした。ところが僕があまり張り切って動転したのかヒモの先をどこかに結んでいなかったから、鍋に引きづられヒモも水の中に落ちてしまった。何も役に立てないこの僕がよりによって疲れ切った彼らの足を引っばることまでしてしまった。だがオリビエは「アラー」といって笑顔をつくり僕が要求したフックを作ってくれ、それでなんとかヒモをすくい上げることができた。僕のミスで給水までが二時間を要した。

日本人ならどうする

車のまわりには現地の子供が群がっていた。

「ボンジュール」と挨拶して握手を求める。

次に何かをくれという。握手をすれば必ず何かを貰えるものと考えている。つまらぬことを覚えてしまったものだ。

だが仏人の三人はやさしい顔をつくって色々なものをあげている。英国の老人は煙草を少し出したがすぐに怒鳴り始めた。さて日本人ならどうするか。日本人は人が好いからすぐあげてしまうだろうと誰しも考えるだろうが、それは香港あたりでのバック旅行者の姿であって、僕の考えるところでは日本人は物乞いに対して冷たい。「物乞いをする前に働くことを考えろ」という気持ちになる。どこかに敗戦のどん底をはい上がってきた気負いがあるのだろう。若者たちにそれはみられる。そんな時日本人には宗教的な考えが少しも浮かんでこない。回教国とバクシーシの関係のような意識は日本人には見当たらない。どうやら、それほど日本人と宗教とは薄い関係になってしまったようだ。僕とて同じこと、こうした場面に出会うとどう考えてよいものかわからなくなる。とうとう僕は何もやらなかった。

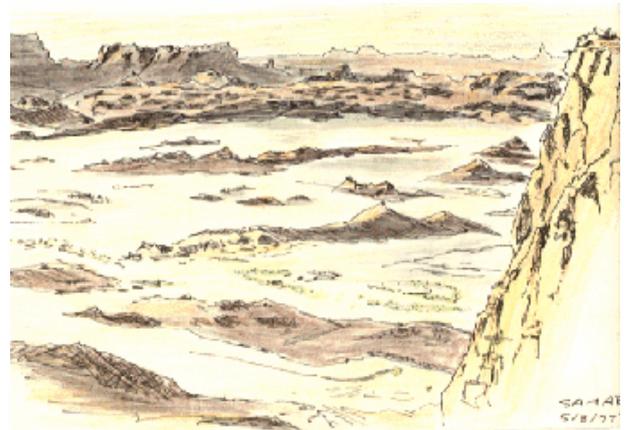
判断

三時になってやっと出発、着いたのは朝の七時半だったのだ。これからニジュール側国境のアサマランカまで数十キロ／これがまた難関である。国境が見えなくなったころすぐに砂の深いところが現われて先行していたノロノロ車が埋っている。僕らもその先であえなくダウン。空腹を一粒の角砂

糖でいやしながらやつのことで追い出すと皆砂の上にバタバタと倒れてしまった。次にはノロノロ車の救助が待っているのだが、オリビエは立ち上がるとプレートを持ってノロノロ車に背を向けて自分の車の方へ歩いていく。

「助けないのか？」とカナダの二人がオリビエにつめよる。オリビエは「ノン」という。そして横を歩いている僕に「サザならどうする？」ときいた。僕は困った。この四日間自分の判断をまきししていなかったもので、とっさにどうすればよいのか決められなかった。それで、「日本人なら助けるだろう」と答えた。答えながら本当だろうかと考えた。

日本人は言葉の障害で西欧コンプレックスにひたる。もしくは他律的な性格から発言の姿勢がややふやだ。それがこうした場面に立った時には自分を失ってそれならよい子になろうとするんじゃないか、そんな気がして日本人ならと答えたのかもしれない。マルチンもオリビエに抗議している。するとベルナードが強い口調で「ノン」といった。カナダ人は強硬にオリビエに食い下がる。その姿が僕には眩しい。僕はといえば、リーダーのオリビエにすっかり従うことしか考えていなかった。この違いはそっくりそのまま自律と他律につながるような気がした。僕は自律的な人間になりたいと思っていた。日本人全体がそうなるべきとも思えた。だが自律的とか個人主義とかいうものはっきりした姿がつかめなかった。個人主義と利己主義とは当然違うのだが実際の生活の中では多くの場合同じものになりはしないか、日本人が個人主義に走った場合いったいどうなるのか、わからぬまま日本を出た。ヨーロッパでそれを見るのが楽しみであった。今、僕はそのチャ



ンスにめぐり会えている。

結局多数決が始まった。オリビエはリーダーの権威を行使しようとしな。そして最後に僕が答えなければならなくなった。リーダーのいない今、僕は自分で判断しなければならない。僕は空腹と疲れで助けるのは嫌だった。それにノロノロ車には別断借りはない。今あるのはモラルに於ける疑問だけだ、またしても僕にはモラルを考える根がないことに気づく。そんな僕を助けたのは山の中の遭難救助だった。こんな場面があったように思う、そして僕は救助したのだ。「僕は助ける方に賛成する」と答えた。

仏vs英

結局4対2で助けることになり僕は重い足を引きづってノロノロ車の方へ向かった。

「サザ、あいつは悪い奴なんだ。自分らだけでコーヒーを作って他の人には与えようとしな。だから僕らは彼らを助ける必要がないんだ。」とベルナードが言った。つまらぬことを覚えてしまった子供達にもやさしい顔で対していた彼らだからケチで有名な英国人の態度は気に入らないのであろう。いつでも笑顔を絶やさないオリビエまでがふくれた顔をしているのだ。

ノロノロ車にたどりつくると僕はプツと吹き出してしまった。彼らはキャンプを始めており、なんとコーヒーを飲んでいたので。

「どうした？」とイボンヌが声をかける、

「もうだめだよ」

「どんな様子かわからないから見にきたよ」

「あーそうかい。明日にでもトラックが通りかかったら引っぱってもらおうよ、今日はもうおしまいだ」

オリビエはどうだこのとおりでいいかげにふくれ顔をみせ「この先はもっとむずかしいぞ」といつて戻っていった。仏人と英国人の対立は有名だが、この場合、英国人の態度は悪かった。「ありがとう」の一言もなかった。

カナダ人

僕らは出発した。しばらくはよい道が続いたがまた砂の深いところに出くわし、危うく三台追突するところであった。そこでキャンプを始めた。

イボンヌがテントを張るのを手伝ってくれというので承知した。

「イボンヌ、僕もテントを持っていたんだけどね、失くしたよ」と僕は荷物のことを話した。

「本当か、それは大変だったね」

「でももうどうってことないよ、バックザックを作ったしね、後でみせるよ」

「それはすごいな。僕らはアガデスに入ってからが大変なんだ」

「どうしたの？」

「タマンラセットで金を全部盗られてしまったんだ、幸運なことにトラベラーズチェックだから再発行してもらえるんだが、アメリカンエクスプレスの指定銀行がアガデスにないんだよ。それでカノで受け取れるようにテレックスを打ったんだが、アガデスまで一文無しなんだ。そしてカノへ抜けるにはビザの有効期限があと五日しか残ってないんだよ」

「五日じゃ無理だね」

「だからニアメイに行ってビザを作り直さなければならぬんだ」

「それは大変だ」

「うん、でも彼らニアメイまで行くから一緒についていける」

僕はダイアナの顔に影がある理由がわかった気がした。一文無しでよくタマンラセットから出てきたものだ。僕は金を貸そうと思った、現金を貸してはいけないという常識のようなものが旅行者にはあるが、荷物を失くしてすっかり親切を受けた身であつてみれば黙ってみのがしてはいけないような気がした。とにかくアガデスに着いてからだ。

ラジエターの水で茶会

僕らはチェスをしながらスパゲティの夕食をとった、それは胃の壁にあつと言う間に吸い取られてしまった。

国際色豊かな一日は終わった。車は故障続き、カナダ人は問題を抱え、僕もどこかおかしい、なにやら奇妙な取り合わせがこの旅を予言していたように思う。

僕はまた砂の上に寝る。オリビエが「これじゃ不十分」だと寝袋カバーと毛布だけの僕を見て言う。「ううん寒くないよ」と僕は言う。

オリビエはマルチンに「サザは寝袋を持ってないんだ」と話しかけた。イボンヌがそれを聞いて僕の事故を話した。するとオリビエは再び僕のところへ来て「サザ！」と大声を出すと握手を求めてきた。それから僕らはティーパーティーがはじまった。アラビア流に濃い茶をつくり、しきたりを真似て小さなコップに三杯ずつ飲んだ。その水はラジエターに入ってた水だと聞いて皆ガッカリしたが、すっかり気分は明るくなった。

満点の星空を仰ぎながらイボンヌがいった「サザ 落日を見たかい、今日の落日は助けてくれることを意味しているよ、そんな色だった」「そうだね、朝はやけにキラキラしていたけど」

5日目

ニジェール

さあ今日こそニジェールだ、ブラックアフリカがそこにはある。

20分も走ると広い広い台地の先に小さな二こぶの緑が眼に入った、そしてそこがニジェールの玄関であった。小さなポリスオフィスがあるだけだった。そこには鉄管から水が常時出ている、手を洗うと驚いたことに温かい。タンクの中でお湯になったのだろうと飲んでみたら鉄くさい。どうやら温泉が湧いてるらしいのだ。

皆はその湯で身体をふき頭を洗い、洗濯まで始めた。それは気持ちのよいものだった。サラサラの髪を風に揺らしながら皆はコーヒーを飲む。ここまで来れば一段落だ。ホッとした表情がみえる。

とうとう一カ月間のアルジェリアの旅は終わった。アクシデントもあった、喜びもあった。泣き笑いの旅に僕は満足していた。

怖いんだ

平和な空気が流れている中でオリビエ一人は整備の手を休めようとしなかった。三時間かけてそれは終わり、オリビエも身体を洗ったがなかなか出ようとしなない。一台、二台と到着するツーリスト達と話しているうちに昼が過ぎた。なぜ出発しないのか知らぬ僕はトラックの大きなタイヤによりかかってまた蜃気楼をみつめていた。静かで平和で頭の中がすっかりカラっぽになった。

オリビエが僕を呼ぶ、そしてアガデスの方を向きながら「サザ俺は恐いんだよ」といった。砂漠は



ゆらゆらと煮えていた。オーバーヒートの連続がオリビエには不安なのだ。

「そんなことはないよ、オリビエを信じてるさ」僕の言葉はまったく本心のままだった。今は他力に従っているだけだ。そんな時恐怖感というのは起こらないらしい。僕がリーダーで山に入った時にもよくそれは見られた。その時は僕が恐れて後輩が平気な顔をしていた。だが、危険の度合はお互いに違うものではなくリーダーの感知するものが正しいのだ。まだアガデスまで500キロもある。僕らは遭難しかけているのだろうか。何も知らない、そして何もしようとしない僕、危険がそこにある、でもいいさ何が起こっても受けとめて喜んでるのが旅行者だ。

朝七時に着いてから十時間の後に出発。整備した筈の車はまたしてもトラブルを起こす。心配顔のポリス達の前で僕はとうとうロープで引いていくことにした。一時間半なんとか走ってキャンプ。夜のうちに走るのが一番だが道は不安定だ。

6日目

みえる先は10kmまで

砂の上で寝ている僕のまわりをツバメがヒュンヒュンと飛び回る。まるで僕の眼を突つこうとするかのように近づいてくる。どうしてこんなところにツバメがいるのか不思議でならない。水が一滴もないところに鳥がいる。花はおろか草だってないのに。

ニジェルに入ると道は堅くてよくなったがケルンもなく表面に残るわだちの影も薄い。標識は同じようなものが5キロおきに立ってはいるが距離の表示はなかった。僕らはその標識めざして走っていく。人間の眼なんかたいして遠視できるものではない。僕が見つけれられるのは二本目の標識がやっと、つまり10キロが限度だ。合衆国がすっぽり入ってしまうほど大きなサハラである。地平線の世界が続いての少しも不思議でない。でも行けども行けども球形の果てが続くと気が遠くなってくる。この先、街なんてあるのだろうか。

僕らは標識を捜しながら走った。いつもは眩しいほどの世界なのに今日は雲があり、熱風が吹き付けて砂を舞いあげ、空全体を灰色にしている。太陽の熱は灰色全体から襲ってきれば地表からはゆらゆらと炎が上がっている。たまたまなくあつい。気がつくときすっかり緑を失った黄色の小さな草が一面に生えている。どうやらこのあたりは雨があるらしい、それで雲があり灰色の世界になる。

僕らの横に駱駝が姿をみせる。野生なのだろうか？炎の中で燃え上がってしまいそうだ。二頭三頭と増えて行く、そして突然灰色の中から幽霊のようにトウアレグのテントが現われた。駱駝は彼らのものだったのだ。子供がテントから飛び出してくる。僕らは危うくはね飛ばすところだった。あつと言う間にテントは後方に消え灰色の世界が残った。炎の中で彼らは生活している、それは途方のないもののように思える。

この熱さで僕らはまたオーバーヒートを繰り返して、涼しくなるまで大休止となった。知らぬ間に皆は車の下に姿を消し、マルチンはビキニ姿になっていた。何もわからない僕はその様子で大休止を知ることができる。

太陽

車の下を占領されて僕はしかたなくタイヤによりかかった。もうどうでもよい。空腹と煮える熱さまで思考すらできない。身体全体に熱がおおいかぶさっている。

「太陽という奴をにらみつけてやろうか」と考えた。この熱さは地面全体がゆらゆらと燃えているかのように見えるが、真実は太陽が熱を出しているから地面が焼けゆらゆらと炎を出しているのだ。そんなバカなことを真剣に考えながら太陽をにらみつけようとした。

「いったいどんな奴なんだ」

考えてみれば昼間に太陽などみたことがなかったように思う、砂漠の中では足元と真上はみないようで眼の高さばかりを遠視する、さあ真昼の太陽に眼を向ける。

「あー、この太陽のなんとバカげた姿！」均等に光を分散できずに、勝手にまかせ片方にだけ光が集中して口をとがらせている。

「熱い、この光の熱さはどうだ」

なんとかその正体を見たいと思って丸いはずの相手をもう一度にらむが、なんと輪郭が見えない、区別がつかない、炎の姿しか見えないのだ。

「なるほど大した奴だ」僕はすっかり負けて黙り込んだ。

エゴvs義理

僕らにはさらに大きな問題が発生していた。オリビエ達は真剣な顔で討論を申し込んだ。どうやらガソリンが足りないらしい。エンジントラブルで倍以上もガソリンを食っているのだ。

なんてことだ、毎日二時間ずつしか走れないのにガソリンまで不足だとは、食糧も底をつき出している。水もラジエターを冷やしたのを飲んでいくというのに。今まで何が起きてても楽しんでいた僕の心も少しずつ反発が湧き出してきた。

今朝、僕らの後ろでロープに引かれていたマルチンの車のはねた石を受けてフロントガラスの半分を失った。運転するマルチンはまともに埃を被っていた。ロープの長さは10mしかない、埃を眼の中に入れながらすぐに停止できない砂の上を走っている。ちょっとしたミスで追突はまぬがれない状態だ。もう僕らには担架が必要だった。

ガソリンもない今、一台を捨てるべきではないか、それですべては解決する。だが彼らが最善策として選ぶべき一台を捨てるということはビジネスに於いて最悪なのだ。しかし、遭難に直面している今、ビジネスというエゴはドライバー側だけのもので、そこにドライバーとハイカーの溝ができる。僕はそれなら別の車をつかまえて逃げ出してもいいのだろうか。今こそ会話に入りたいと思った。仏語をいまいましく思った。イボンヌに通訳してもらおうと考えたが動かなかった。

憂鬱なムードになった僕らの前に一台のオレンジ色のワゴンがやってきた。彼らはタマンラセツ

トで顔なじみのオーストリアの青年達だった。僕をみつめて驚いていた。

「ヒッチしたのか」

「うん」

「どうだい調子は、悪いみたいだが」

「うんもうメチャクチャだよ、六日目だよ」

「六日！？そりゃひどいな」

トラックなら二日でサハラは越えられるのだ。イボンヌが彼らにさっそくガソリンを分けてほしいと言うがそれはやはり無理だった。まだ先は長いのだ。だが彼らは気前よく食糧と水を分けてくれた。そして「グッドラック」と拳を握り締めて僕に合図した。僕も「OK」といって拳を握ってみせた。彼らはすぐに灰色の彼方に消えていった。僕は残った。そしてそれが当然のように思えた。

道がない

夕方になると熱も風もおとなしくなった。僕らは出発した。20キロ走ってはエンジンを休ませる。なんとか70キロも走ったところで今度は道を失った。そのあたりの指導標は倒れていた。わだちの跡はあるが新しいものではなく砂の深いところがある。

5キロ置ききの標識は遠視がきくこの地形では充分だったが二本連続して倒れていけばもうわからない。オリビエはマルチンの肩を抱いて道を捜しにいった。球形の中、彼らの姿だけが浮かんでいった。そしてキャンプにした。今日も二時間しか走れなかった。このあたりは草がある。それで虫も多かった。大きな蜘蛛がいて夕食を作るマルチンが悲鳴をあげた。砂だけの世界、その死んだ世界が恋しくなった。

闇の中でじっと食事を待っていた僕らの耳に車の音がする。同時に二つのライトが見える。同時なのが不思議な気がした。そのライトは僕らに近づかず遠くを走っていった。どうやら道が違うらしい。そしてもう一台が現われた時、オリビエとイボンヌはその方向へ歩いていった。トラックをつかまえて何やら話をした後、二人は急ぎ足で戻ってくると、「さあ出発するぞ、トラックの後をつけるんだ」僕らは大慌てで食事を済ませる。

置き去り

トラックの後部ライトはかなり遠くに行ってしまった。オリビエがすぐに車を出す。ベルナードは若いせいかひどく緊張して運転が思うようにいかない。乱暴にロープを引っぱったのでそれは切れてしまった。すぐに僕が結び直し再度走り出すが今度は砂にはまった。トラックはもうほんの小さな光りになって視界から消えそう。僕とイボンヌは満身の力を込めて押した。そして脱出、車はスピードをあげる、あわてて二人は前後に分かれ僕は「カモン」というベルナードの声に答えて全速力で走りながらドアを開け飛び乗った。ところがイボンヌが乗り遅れたらしい、マルチンが片方だけのライトを点滅させる。「ストップ、ベルナード」「どうした」「イボンヌが乗ってない」「でもこれじゃとまれないよ」すっかりあせっているベルナードはそのまま走って待っていたオリビエのところまで行ってしまふ。

それを知ってあわてたのはオリビエだけではなくダイアナであったのは当然である。彼女は「イボンヌは？」と悲鳴をあげると闇の中へ歩き出していく、僕は彼女の横を歩いていった。「ムッシュー」と彼女は呼びながら泣き出してしまった。僕も声を限りに「イボンヌ」と呼ぶが応答がない、一キロも走ってはいないのに、声はどんな場所よりも遠くまで届くはずなのに、なぜ応答がないのだろうか。ダイアナはもう絶叫に近い声を出している。闇の中でどの方向に歩いてよいのかわからぬまま足は早い。そしてやっと応答があり、イボンヌの姿が星明りの中に浮かんだ。ダイアナはその胸に飛び込んで再び泣いた。イボンヌは腹を立てているのか、何でもないさと言いたいのかダイアナを抱いたまま無言で歩いていった。

イボンヌに最初に話しかけたのはベルナードではなくオリビエだった。「大丈夫かい」「なんでもないよ」ベルナードは自分のミスの前ですっかり若さを暴露してしまった。

トラックは僕らに気付いたのか待っていてくれた。僕らはノロノロ走るその後についていった。ベルナードは眠いといいタバコを何度も要求した。道がはっきりしたところで僕らはトラックを追い越しスピードをあげた。夜の冷たい風はエンジンを落ち着かせた。三時まで走って僕らは木の多くなった場所にキャンプした。

7日目

物乞い

僕らが泊ったのは小さな部落の手前であった。例によってオリビエのいじくりが始まってなかなか出られない。そこへ駱駝にのった子供達が現われ、例によってボンジュール、握手、物乞いを始めた。それはまるで大人から指示されているかのようには割り切つて、執拗でずるがしかった。それでもオリビエ達は不要になったチューブなどを与えた。子供達はちょっと眼を離すと盗もうとした。盗もうとして隙をうかがっている彼らの緊張した顔はいやらしさで一杯だった。僕は容赦なく怒鳴りつけた。ベルナードがじっとそれをみていた。

そこらには家畜が沢山みられた。どれもが炎の中で溶ろけていた。木が多くなりライオンも顔を出しそうな、いわば僕らの知識にあるアフリカの姿がみられた。木も草も皆枯れた色をしていた。そして空は同じように灰色で熱さはより以上になっていた。風が正面から吹いて僕らの車から砂ぼこりがすごい勢いで後の車を襲い、フロントガラスを全部なくしていた車内に吸い込まれていった。オリビエの顔はすぐに真白になり、ベルナードに交代すると彼はすぐに老人のような姿になった。

パンク

オーバーヒートは起らなくなったが、僕らを次に襲ったのはパンクだった。熱い熱い道を走っているうちにタイヤはちぎれ、気がつかぬまま走っているとまるで布切れのようにズタズタに裂けからみついてしまった。疲れと空腹でグデグデになりながらタイヤを交換、ここで僕は役に立たなければいけないと思ってガンバル。ところがまたすぐにパンクした。

「あと一本しかないよ」とオリビエがウインクする。チューブを外しながら彼も肩で息をしとうとう「疲れた」と言った。何から何まで先頭に立っていたオリビエに僕は素晴らしいリーダーシップを見た。

イボンヌも僕に言っていた、「オリビエは素晴らしい男だ、いつでも笑顔をつくってチームを明るくさせている」僕には、オリビエの個人主義がやっと解ってきたようだ。オリビエは誰のミスも笑顔

で答えてあげる。彼はいつも黙って答える。僕は個人主義というのは、相互主張してゆずらぬものとはばかり考えていた。僕はまた「宝」を増やしたようだ。

僕はノビてしまったイボンヌとベルナードに代ってオリビエを手伝った。とはいっても僕の足もフラフラだ、タイヤをつけて道具を片付ける時には一息ずつ肩を大きくゆらした。その僕の眼に蜃気楼の海を歩いてくる駱駝の列が入った。長い足が水面に映りさらに長く流れている。その姿はまるで地中海の浜辺の昼下がりのようだった。

「幻想的だな」

すると部落が現われた。テソウムだ。皆は大喜びだ。バザールがみえる。ここで食糧と水が手に入る。そしてアガデスまであと200キロなのだ。黒人が僕らの周囲に集まる。

親切

トゥアレグと同じ物乞いなのだろうかと思ふが身構える。だが、定住生活の彼等はものをねだろとはしない。それどころか僕らの様子を見てトラックのドライバーが食糧をくれた。

また、若者が部落を案内してくれた。熱風が吹きまくり、砂塵が舞っていた。土でつくった家も人間も動物も、その中でじっとしていた。部落の近くには大きな近代的な建物もあった。聞けばなんと日本の企業がウラニウムの採掘調査をしているというのだ。僕はひどく感激した。ここはまだサハラの中だ。そして、ほんの小さな部落、熱と砂の中の生活、こんなところまで日本企業が来ている。僕は日本人に会いたいと思った。

会話から見放された僕がそれを要求したのかどうかは確かでない。確かなのは空腹で歩くのも辛かった僕の目に彼等が「よくきた」といって差し出す山盛りのご飯が目についたことだ。あー僕はもうボロボロである。部落の中ではJAPAN,JAPAN と歓迎してくれる。日本雑誌の切り抜きが張ってある。「いつてみたいな」と僕は建物をみた。そこへベルナードが声をかけた。

日本企業

「サザ、一つ提案があるんだ。僕らは40リッターほどガソリンが足りない。その日本企業のところへ行ってサザがたのめば分けてくれるだろう。どうだい」僕はその瞬間、嫌な不安に襲われた。恋

しさと逆に現実となって、果たして日本の企業が僕を歓迎してくれるだろうかと不安になった。

僕らは肉を手にとるとテソウミを出す。そして、日本企業に立ち寄った。門から入ろうとすると現地人の門番に猛烈な勢いで追い出された。僕は日本人が出てくるのを待っていた。僕の後ろでは皆が成り行きをみつめている。やっと一人を呼び止めることができた。僕は事の次第を話した。ボケているのと、急に日本語になったのとでうまく話せなかったが、

「よくガンバりますねー」と若い細い目をしたその人は迎えてくれた。

「それよりこんなところで仕事をしている方が大変じゃないですか」

「いやー、中にいれば日本と変わらないですよ、テレビも見られるし」。なるほど設備はよさそうだった。食堂脇に積まれたコーラの瓶に僕の目は吸い付いて離れない。

「ちょっと待って下さいね。僕じゃどうにもできないんで、あの人が担当なんですよ」といってその人は担当者の方へ歩いていった。イボンヌがきて「どう？」といった。僕はなんとも答えられなかった。どうしても勝たなければいけないと思った。皆の姿はボロボロだけど、その旅の中で助け、助けられてきながらホスピタリティーに賛歌を送ってきた仲間達だ。初めて出会う日本人とはどんなものかと注目しているに違いない。それに当然成功すると考えている筈だ。

若い人は担当者に説明を始めた。精力的な姿を感じさせる担当者はそれに二、三言答えると僕の方をふり返ることなく事務室に入ってしまった。僕は直感した。

「大変申し訳ないんですが、担当者に聞いてみると、政府に禁止されているというんですよ。個人的にはねー、なんとかしたいんですが」

僕は何をかながえてよいのか分からなくなった。嫌な予想が的中したという気持ちで一杯になった。僕らの行動は遊びにすぎない。だから、無視されて当然だが、いったい今の今まで僕達はどんな風にしてもらっていたと思うんだ。

たった今だって、ニジェル人のドライバーが食糧をくれたじゃないか。「サバ」といって部落の人が案内してくれたじゃないか。嘘ばかりが見えた。砂漠には嘘などない筈じゃないか。ガッカリして僕は車に戻った。

「ジャパン ノーグッド」とオリビエが冷やかす。「ウイ」と僕が答える。

三十分走ったところで僕らは車を停めて、肉を食べた。それは羊という話だったが、駱駝のように思えた。久しぶりに腹に力強さが宿って、僕らは元気一杯になった。そんな時またオリビエが僕を冷やかした。「砂漠グッド、ツーリストグッド、部落グッド、だけど日本ノーグッド」「あれが日本の企業だよ」「働いて金をもうけてそれしか知らず、何も残さない」とベルナードがいう。その顔には残された文化しか誇れなくなった仏人の片威張りがみられたが、そんな姿で彼らに、いや、もっと広い地域の人々に日本はみられているに違いない。

「日本人ではなく、会社の意識が悪いんだよ」と僕が弁解する。イボンヌはそれに賛成してくれる。どうであれ僕は寂しい。

僕らの前でランドローバーが止まり、老人が三人降りてきた。「アガデスのキャンプ場はよい。プールもある、レストランも...」という彼等の話に皆すっかり喜んだ。明日には絶対着けるだろう。僕らは彼等にエンジンオイルを分けてほしいといった。すると三つしかないうちの一つを無料で分けてくれた。

僕らはその夜、肉のおかげで九時半まで走った。途中幾度もロープが切れた。熱と砂でロープは完全に老化してしまった。ロープを結ぶのは僕の仕事だ。「サザはうまい」と皆が褒める。「僕は日本のクライマーだ」といっておいた。のおかげですっかり僕も仲間の一員として役に立つことができるようになった。だが、その度に車の下に潜るのは容易ではなかった。

7日目

遅い出発である。それは「今日こそアガデス」の安心感からなのか疲労からなのか。僕らは数回ロープを千切りながらアサウの部落についた。あと70キロだ。

そして、いよいよガソリンは3リッターを残すだけになった。「あと何キロで終りか」とオリビエが皆にクイズを出している。計算違いでアガデスまでたどりつくさと僕は答えた。実際そうであってほしかった。

ロープはもうボロボロで十分毎に切れる。「サザ！」と呼ばれて僕もすっかり疲れる。そこでタイヤのチューブを真中にいれてショックを和らげるようにした。すると快調である。だが、今度はパンクだ。また、不吉なムードが高まってきた。ガス欠と最後のタイヤ交換。50キロを残して今夜もアガデスに入れぬのか。

そこへプジョーが通りかかり、僕らは幸運にもガソリンを分けてもらった。全員の顔に疲れながらも笑いがでる。あとは慎重に走っていただけだ。アガデスに入ったらビールを飲もう。ビッグディナーを食べようと皆、食い気の話ばかりしている。でも、全員の心の中には「安心できない」という気持ちがあった筈だ。

ツアー

また、ロープが切れた。僕が車の下に潜っているとトラックがきた。それはロンドンから南アメリカまで走るツアーの連中だった。若者が運転している。荷台はホロがかけられ、クッションのよきような座席が向かい合って並べられていた。

客はミニスカート姿の女の子から老人までと幅が広い。驚いたことに日本人が一人混じっていた。お互いビックリして顔を見合わせた。

ツアーの連中は僕らのボロボロの行軍にキャアキャア声を上げていた。僕も冒険旅行をしてきたような気になれて嬉しかった。長くて、時には孤独な旅だったが、目の前にある安定したツアーの旅よりどれほど得をしたろうか。それはもちろん無料ということを含めてだ。

「サザ、アガデスよ」とマルチンがいう。

「ああ、トレビアン」と僕は答えながら以外に無感動なのを知って驚いた。まだまだこの凸凹道中を続けたいような気もした。

キャンプ場に入るとまずビールで乾杯した。そのうまさを言葉にするだけ感動は消されてしまう。朝からスープと缶詰をつつただけの僕らはボーッと顔を赤らめた。僕はイボンヌとダイアナに百ドル貸すことにした。すっかり安心しておまけに酔っつもいた。彼等二人に感謝されたのは言うまでもない。彼等の言葉を聞きながら百ドル貸したのは僕ではなく、旅の出会い、そこにある親切のような気がした。僕はどんどん甘くなるばかりだ。それが平和な顔をつくってくれればよいのだが。

8日目

誕生日

翌日はなんと僕の誕生日だった。それはあまり嬉しくないものだった。とうとう28歳になった。まさに、時間の方が僕より早く回っているだけなのだが。その日、役にも立てず、黙り込み、遠慮ばかりしていた日本人は仏人達に盛大なパーティーを開いてもらった。僕は心の底から彼等に感謝をし、そしてサハラの旅に笑顔をつくった。

次の夜はイボンヌとダイアナからツーリスト同士のささやかなディナーを受けた。僕は喜びの中で一つだけ気になるものをもっていた。カナダの二人とオリビエ達の間で冷たい空気が流れている。

翌日は僕だけがオリビエ達の食事の仲間に入れてもらった。僕は両方から笑顔向けられた。なんだか日本の柔軟外交が目についた。だが、僕は利害に左右されたのではない。平和でいたかったからこの結果を呼んだのだ。いや、そうであってほしい。そしてカナダの二人は別の車をつかまえてニアメイにいつてしまった。僕もオリビエ達より先にアガデスの町を出ることにした。このままでは幸福すぎる。別れはつらかった。オリビエは僕の肩で泣く真似をした。マルチンも寂しそうな顔をして、「パリにきたらビッグディナーをつくってやるわ」と約束してくれた。

キャンプ場から町まではベルナードが送ってくれた。そしてイボンヌ達のことを話してくれた。「彼等は僕らに百ドル貸してくれと聞いた。僕らはドルを少ししかもっていないから貸せないと断わった。すると彼等は車があれば金は手に入るだろうと聞いた。でも、僕らは売れてからじゃないと貸せないと断わった。それで彼等は怒って先にいつてしまったんだ」

僕はそれを聞きながらすっかり何が何だか分からなくなった。だが、次に分かったんだという気にもなった。

僕はベルナードに別れをつけてジンデル行きトラックにのった。木の葉の旅はまだ長い。陽気なブラック達と接して、次にはヨーロッパへ、そしてアメリカに行かなくてはならない。サハラ・ザックはもうすっかり僕のものになってきちんと横に並んでいる。

「さあ、ボロボロ同士で旅をつづけようか。平和な顔がつくれるまで」